



神武天皇祭での神職参進の様子。この時季深田池畔には桜が咲き誇る。

かしはら



かしはら
第178号
令和三年
紀元2681年

神武天皇祭

榎原神宮宮司 久保田昌孝

日に日に春の訪れを感じる候となりました。御崇敬各位には、平素より榎原神宮に對しまして、尊いお心を寄せて戴いておりますこと、洵に有難く深謝申し上げます。

扱、四月に入りますと二日御鎮座記念祭、三日神武天皇祭と榎原神宮にとりまして重要な祭典が続きます。

御鎮座記念祭は御承知の通り、榎原神宮が神武天皇御即位の聖地であり、政を行わせられた榎原宮址に明治天皇の御聖慮により、明治二十三年四月二日に創建された日を記念する祭典であり、神武天皇祭は神武天皇が崩御された日に行われる祭典であります。隣接する畝傍山東北陵（神武天皇陵）でも毎年勅使が参向され、祭典が行われます。

五年前の四月三日は神武天皇二千六百年の御式年にあたり上皇皇后両陛下（当時天皇皇后両陛下）には神武天皇陵に御参拝され陵前で御告文を奏上され御拝礼、午後から榎原神宮に行幸啓遊ばされましたことは、皆様の御記憶に新

しいことと存しております。

この神武天皇祭が近づくと、近隣の方々には誰彼と無く「もうすぐ神武さんですなあ」と自然に挨拶をするようになります。

戦前において四月三日の神武天皇祭は、国民の休日でありました。明治六年十月十四日の太政官布告第三百四十四号「年中祭日祝日ノ休暇日左ノ通候条此旨布告候事」として八つの祝祭日が定められておりますが、その中に神武天皇祭があり、勿論、紀元節も含まれていて、何れも休日と定められています。

神武天皇祭のこの日は地元では古くより「神武さんレンゾ」と呼ばれており、榎原神宮・神武天皇陵に詣でる風習がありました。農作業の始まる前の春の日がな一日、親類縁者を招き、御馳走を振る舞い、或いは弁当を持って野山に出かけて楽しく過ごす行事であります。因みにレンゾは連座の文字を充てるようです。何時の時代からか、地元の方々には神武天皇に親しみを込めて、神武さんと呼んでいますので、神武レンゾも単に神武さんと呼称されているのです。

榎原神宮では御創建以来、二月十一日の紀元

- 〈宮司挨拶〉・神武天皇祭
 - 〈寄稿〉・第一回 榎原神宮連歌奉納
 - ・榎原神宮紀元祭への祭器奉納について
 - ・「榎原神宮トワイライトコンサート」開催について
 - ・重要文化財旧織田屋形大書院・旧織田屋形玄閣（文華殿）修繕工事について
- 〈境内紹介〉・榎原神宮の杜

祭を以て例祭日と定めておりますが、当初は四月三日を考慮しておりました。明治二十三年三月十九日付けで、奈良県知事より内務大臣宛に「橿原神宮御例祭之儀ニ付上申 今般官幣大社ニ列セラレ候橿原神宮祭日之儀ハ四月三日神武天皇御祭日ヲ以テ自今御例祭日ト御確定相成度此段上申候也」と申し述べております。

春四月は気候も温暖で桜も咲き、一年中で最も過ごしやすい時季でもありますので、二月の紀元節よりも神武天皇祭の日を選んだものと推測致します。結果的には明治天皇の御治定により紀元節を例祭に定められましたが、橿原神宮では例祭に次ぐ春の大祭として御奉仕をしております。

又、宮中での神武天皇祭は大祭として行われ、御歴代天皇・皇后・皇族の御霊を祀る皇霊殿で行われる親祭であります。天皇御自ら御奉仕され、御告文を奏上されるのであります。また夜には皇霊殿御神楽が行われ、御神楽を奉奏して御神霊をお慰めする祭典が行われます。

この様に神武天皇祭は単に橿原神宮で齋行されるのみならず、宮中においては天皇親祭で行われ、御陵には毎年の祭祀に勅使が参向される祭典であります。皇室・皇族の神武天皇にお寄せになるお心がおわかりいただけることと存じます。



陸上自衛隊中部方面音楽隊による 医療従事者の方々への慰問演奏会を開催

令和二年十月二十四日に外拝殿前特設ステージにて陸上自衛隊中部方面音楽隊による医療従事者の方々への慰問演奏会を開催致しました。

陸上自衛隊中部方面音楽隊による演奏会は四月に橿原神宮御鎮座百三十年を奉祝して行われる予定でありましたが、新型コロナウイルス感染症感染拡大により延期となっていました。しかし、医療従事者の方々をはじめ、多くの方が日夜新型コロナウイルスと闘われている中、ひとときの癒やしの時間になればという思いから、奈良県防衛協会が主催となり陸上自衛隊中部方面音楽隊並びに自衛隊奈良地方協力本部をはじめ多くのの方々の御協力を得て実現することとなりました。

当日は、奈良県内の医療従事者や一般公募者七二〇名が招待されました。会場では新型コロナウイルス感染症感染防止の為、招待者の皆様には検温、消毒に御協力頂くと共に、招待席は十分な距離が設けられました。澄み渡る夜空の下、演奏会では、音楽隊長 柴田三等陸佐指揮により天皇陛下御即位奉祝曲「組曲 Ray Of Water」など七曲が演奏されました。演目の中では、鶴三等陸曹が歌

声を披露する場面もあり、招待者の皆様はその柔らかに透き通る歌声に聴き入っておられました。

演奏終了後、陸上自衛隊中部方面音楽隊への御礼と医療従事者の方々へのこれまでの感謝と、今後の活躍を祈念し防衛協会会員と当神宮の巫女からそれぞれに花束が贈呈されました。

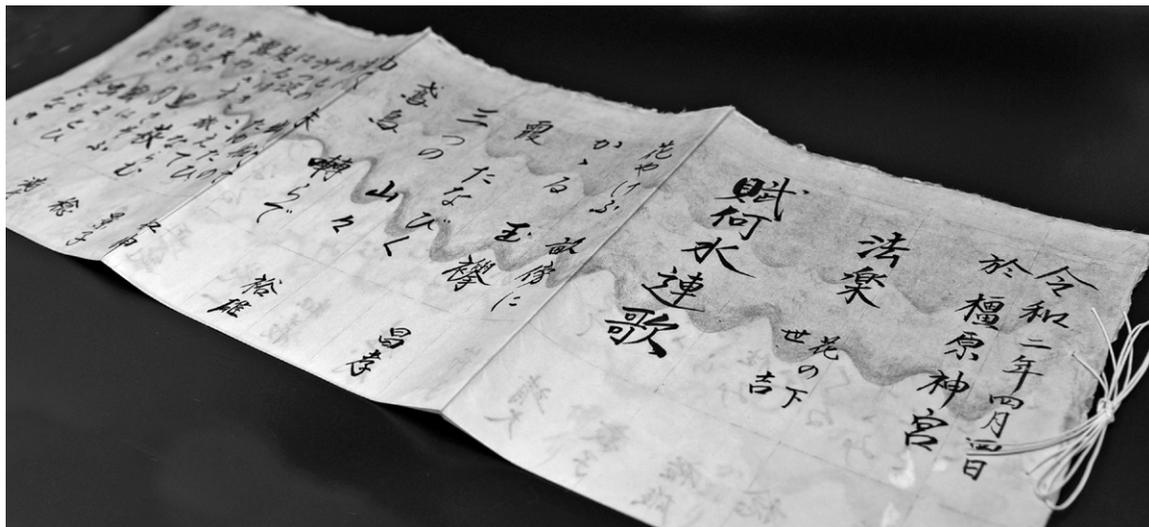
その後のアンコールでは、東京オリンピックが開催されるようにとの願いを込めて「東京オリンピックファンファーレ」と東京オリンピック「ピックマーチ」が演奏され、招待席から拍手が起り会場全体が一体となりました。



陸上自衛隊中部方面音楽隊による慰問演奏会



鶴三等陸曹に花束を渡す当神宮巫女



奉納された連歌。宮司の発句より始まる。

第一回 檀原神宮連歌奉納

京都連歌の会宗匠・南宗寺連歌会宗匠

鶴崎 裕雄

一昨年(令和元年)夏、駒澤大学副学長の久保田昌希氏から檀原神宮で連歌をしてはというお話があった。久保田昌希氏の弟様が檀原神宮の宮司久保田昌孝氏である。早速、大阪堺南宗寺連歌会の竹内魁成氏・高村和義氏と檀原神宮にお伺いし、その席上、京都連歌の会の連衆と檀原神宮で法楽の花の下連歌を行うこととなった。花の下連歌は桜の咲く時、連歌を詠んで神仏に奉納するのである。

初めての檀原神宮の花の下連歌は昨年四月四日に行われることとなっていたが、コロナ禍で中止となり、連歌は電話やメールで行われた。連歌が行われる時、取り纏めは執筆が行うが、一座に集まるのではなく、手紙や電話・メールなどで行う連歌は執筆役が負担が大きい。今回も執筆の大村敦子さんには大変なご負担をおかけした。

連歌は和歌の五・七・五・七・七の上句五・七・五と、下句七・七を交互に読み続ける言葉遊びである。前に詠まれた前句から連想して次の付句を詠む。さらに次の句を詠むというように次々と続ける。本来は百韻といって百句続けるのだが、現在は四十四句から成る「世吉」で巻くことが多い。

今回の檀原神宮の花の下連歌は、宮司昌孝氏の発句「花やけふ畝傍にかかる玉櫛」に始まった。「玉櫛」は「畝傍」の枕詞である。檀原神宮での

連歌奉納への熱い思いが伺われるようである。宗匠の私、鶴崎は「霞たなびく三つの山々」と大和三山にかかる春霞を付けた。第三の光田和伸氏は「鳶鳥轉らでゆく床しくて」と神武天皇東征の八咫鳥と金鷄を詠んだ。この後、四句目丸山景子さんは浦の出船を詠み、場面の転換を図った。連歌はこのように前句の内容を考慮したり、場面の転換を図って詠み続けられる。

連歌では最後の挙句の前には花が詠まれる。竹内氏は「国の親のみささぎに花みち満つる」と神武天皇の畝傍陵の満開の花を詠み、大村さんは「光ひさしきうららかな杜」とうらかな春の日差しを詠んで花の下連歌はめでたく終わった。

令和二年十月十三日、京都連歌の会と南宗寺連歌会の有志とで檀原神宮にお参りして玉串を捧げ、連歌を読み上げ奉納を終えた。宮司昌孝氏から花の下連歌の奉納を続けたいというご鄭重なお手紙を頂戴した。

プロフィール

鶴崎裕雄(つるさきひろお)

帝塚山学院大学名誉教授。文学博士。大阪杭全神社・京都連歌の会・堺南宗寺ほか連歌会連衆。全国の連歌会に出席して交流を深めている。駒澤大学の久保田昌希氏とは四十年來の歴史学会の研究仲間。



奉納後、外院齋庭にて(右より3人目が筆者)



檀原神宮紀元祭への祭器奉納について ―天香山埴焼奉製会の発足―

天香山神社宮司 造田 哲也

● 神武天皇と天香久山

檀原神宮の御祭神、神武天皇は九州の日向の国を出立、大和の国へ向け船で東進され、熊野より紀伊半島への上陸後、檀原の地へ進まれるに際して、大和三山の一つであります天香久山の埴が大変重要な関わりを担うこととなりました。

神武天皇は夢の中で天津神より「天香山の土で天平瓮と厳瓮を造り、天神地祇を祀り祈れば敵は自ら従うであろう」とのお告げを受けます。神武天皇は武將の椎根津彦と弟猾の二人に命じ、粗末な服と蓑笠を着せ、おじいさんとおばあさんの姿に変装させ、敵地をかくぐり天香山に潜入し、埴を採らしめることに成功したと具体的に記されています。そして祭器である天平瓮と厳瓮を作り、八百万の神をお祀りされ、檀原の地に大和朝廷を開いて第一代天皇としてご即位されました。

天香久山は古事記、日本書紀、万葉集などの我が国の古典において、日本の国、大和朝廷の発祥に関わる神聖なる場所として承継されてまいりました。古典において天香久山は「天香山」と書き記されます。天照大神の天岩戸隠れにおいても天香山に関わることが多く記され、万葉集では歴代天皇の和歌など数多く詠われています。

日本書紀の崇神天皇の段に、武埴安彦命の謀反のことが記され、その妻の吾田媛がひそかに天香山上りその土を取り、自身の裳裾の端に包み隠し、「この土は倭国の物実なり」と唱え戦勝の祈願をしたとあります。天香山の埴は物実と認識され、国そのものを体現するものであり、その量の多少にかかわらず、天香山の埴は国を統率する権威と権力を得るに必要なものと考えられていました。

伊予、阿波国の風土記には、天香山は天上界にあったものが、地上に二つに別れて天降り付いたとあり、愛媛県松山市に天山の頂に天香山神社と同じ占いの神を祀る天山神社が鎮座します。天香山にかかる枕詞は「天降りつく」となっております。

● 紀元二千六百年奉祝祭と香久山村

明治二十三年、我が国の基であります大和朝廷発祥の地、天香山を見はるかす檀原の畝傍山の麓辺に、第一代天皇である神武天皇を祀る檀原神宮が創建され、その後、神武天皇がご即位されてより二千六百年が経過したとされる佳節であった昭和十五年二月十一日に、国家行事として神武天皇紀元二千六百年奉祝祭が挙行されました。その当時の世情は、その後わずか数年後に終戦を迎えるとは思えぬような状況があり、まさに国の隆昌と、そして武運長久の願いを込めて、全国民総出にてこの佳節をお祝いしようとの機運が当時みなぎっていたのです。

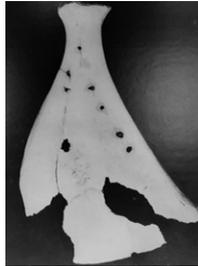
そのような中、檀原神宮近くの天香山を擁する香久山村（現在の檀原市南東部香久山地区と桜井市の一部を中心に構成されていた）では、当時の村長であった竹上正吉氏と村内各町の氏子を中心として、奈良女子高等師範学校教授の佐藤小吉氏、京都の公家で、神祇官の卜事を伝承された猪熊家の猪熊兼繁氏と、「大和志」の発刊者であった田村吉永氏らが協力され、古事記、日本書紀にある神武天皇のご即位に関しての埴にまつわることに着目、この佳節に神話にのっとり、神事を行い埴を採り、祭器をあつらえ、昭和十五年二月十一日の檀原神宮紀元二千六百年祭と、その前年の秋、昭和十四年十一月十一日の遷座祭にお使い頂けるよう、この機会に奉製、奉納申し上げるべく計画が立ち上がり、顕彰会が昭和十一年十一月に組織され、昭和十四年にこれを実現されました。



写真① 天香山神社



写真② 昭和14年 太占卜定神事



写真③ 昭和14年の太占卜定神事で用いた鹿の肩骨



写真④ 畝尾坐健土安神社

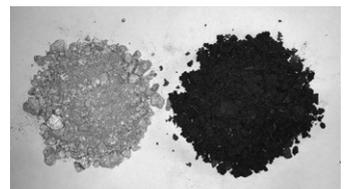
南浦町鎮座の卜占の神を祀る天香山神社〔写真①〕において、埴採りの日程、場所、火入の日程を決めるための太占卜定神事〔写真②〕が昭和十四年五月十三日に齋行されることとなり、火に関わりのある往馬大社様より、古代の方法で火を起こす火鑽杵火鑽臼を進納のうえ、同社氏子総代とともに神事にもご奉仕いただき、神話の通りに御神火を起こし、雄鹿の肩甲骨〔写真③〕を天香山の波波迦の木で焼く太占の神事が行われました。

檀原神宮様には、令和の御大礼の大嘗祭齋田点定の儀に際しまして宮内庁より皇居宮中三殿への波波迦木の献進のご下命があり、往馬大社と天香山神社が平成の御大礼に同じく、その御用を承りましたことから、両神社の波波迦木の献進におきまして、令和元年三月十八日に、檀原神宮久保田宮司様と往馬大社谷野宮司様と参内致しましたご縁を頂いております。

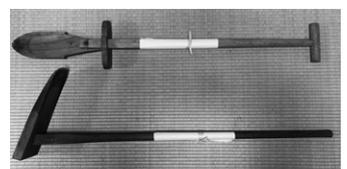
そして太占卜定神事の結果に従い、昭和十四年九月十日に埴採神事を赤埴山頂上にて行うために齋場を造成、齋場への道路も舗設され、土の神を祀る下八釣町鎮座の畝尾坐健土安神社〔写真④〕のご祭神を祀り祭典を行うことが決定され、当時、京都ご在住であった皇族の久邇宮多嘉王妃静子殿下のご台臨を仰ぐこととなり、埴採長には神話通りに武将がこれに当たるべきとのことから、当時の内閣参議の松井石根陸軍大将が任命されました。

往古の昔より埴の採取地は白埴、赤埴〔写真⑤〕の二箇所が公にはされずに伝承されて参りました。殿下ご台臨のもと奈良県知事代理などご参列

頂き、蓑笠を着用した氏子四名のうち南浦町の二名が白埴のご神地、下八釣町の二名が赤埴のご神地へ赴き、地元へ伝わる御田供の歌に合わせてそれぞれの埴を採取しました。このときに使用された鋤、鍬は特別に白樫と赤樫の木で作成され、白埴には白樫製が、赤埴には赤樫製〔写真⑥〕が用いられました。



写真⑤ 埴土



写真⑥ 当時作成された鋤(白樫)と鍬(赤樫)

その埴を用いた祭器の焼成を、奈良の代表的な陶芸である赤膚焼の松田正柏氏に依頼されており、その窯元に齋場を舗設、昭和十四年十月七日に畝尾坐健土安神社のご祭神を迎えた火入式の神事が行われ、往馬大社の火鑽具にて御神火が鑽り出され、鷲尾東大寺管長、奈良県知事代理などが参列されました。「大和志」にこれら三つの神事の詳細が記録されております。

天香山埴焼奉製会の発足と平瓮の奉納

これらのことを踏まえ、この神事を再び執り行い平瓮を焼成することができればと願い、かねてより南浦町と下八釣町の氏子総代を始め地元の皆様、天香山下八釣農園を営む山尾吉史氏と、焼き物に詳しい造形作家の埴田正二氏へご相談申し上げておりましたところ、令和の御大礼が挙行せられることとなり、これを祝し「天香山埴焼奉製会」が組織されることとなり、埴採神事の再興と平瓮の焼成が決定されました。令和の御代替わりに、その機運が訪れたのであります。

久保田宮司様には、大嘗祭齋田点定の儀に際しての波波迦木の献進についてお会いする機会も多く頂いておりますところ、有難くも埴採神事再興のことをお取り上げくださり、二月十一日の檀原神宮紀元祭の祭典にお

いてこの平瓮を祭器として大前にご献上頂くこととなり、恐れながら今後、毎年檀原神宮へご奉納申し上げる運びとなりました。令和元年最初の天香山埴焼の神事を了え、野焼き〔写真⑦〕にて焼成された平瓮〔写真⑧〕を南浦町、下八鈎町両神社氏子総代、山尾実行委員長とともに令和二年二月三日に檀原神宮へ参拝、奉納奉告祭をご齋行頂き神武天皇様へご奉納申し上げることが叶いました。また、天香山神社と畝尾坐健土安神社の天香山埴焼奉製会の各神事〔写真⑨⑩〕に、檀原神宮様より久保田宮司様のご代理として禰宜の上田宗弘様、権禰宜の長倉健一様にご参拝を賜り、ご拝礼頂きましたこと厚く御礼申し上げます次第です。

◎天香山の埴の顕彰

昭和十四年に齋行された天香山の埴の神事を顕彰するため、久邇宮多嘉王妃静子殿下のご台臨を仰ぎ埴採神事が齋行なされた赤埴山の頂上に、紀元二千六百年奈良県奉祝会によって「天香山埴安伝承地」と彫刻された石柱〔写真⑪〕が昭和十五年十一月に建立、合わせ伝承地への道標の石柱も数本建立され、現在も赤埴山の頂上とその周囲に見る事ができます。また白埴、赤埴の御神地を顕彰して建てられた顕彰碑も二基〔写真⑫⑬〕ありましたが、時代の流れとともに損傷も進み、場所も移設され、これらの存在が不明瞭な状況となりましたが、この度、各



写真⑦ 令和元年 火入神事



写真⑧ 焼成後奉納された平瓮



写真⑨ 令和二年 卜定神事

神社境内への移設、整備を進め令和二年八月に竣工致しました。ひとえに皆様のご支援ご協力の賜物と心より深く感謝申し上げます。

神武天皇様と天香久山の我が国発祥に関わる深い縁を、そして今に伝わる伝承の地を顕彰申し上げ、これより先の世へ継承することが叶えば幸甚に存じます。



写真⑩ 令和二年 埴採神事

プロフィール 造田 哲也(そうだてつや)

平成二年皇學館大学文学部神道学科卒業
平成二十五年天香山神社宮司就任
令和元年天香山埴焼奉製会会長就任
檀原市香久山地区の神社十二社(天香山神社他、畝尾坐健土安神社・畝尾都多本神社・天岩戸神社・國常立神社・御厨子神社・三柱神社他五社)の宮司を兼務



写真⑬ 赤埴聖地顕彰碑
畝尾坐健土安神社境内



写真⑫ 白埴聖地顕彰碑
天香山神社境内



写真⑪ 赤埴山頂の顕彰碑



檀原神宮の杜もり

教化渉外課

檀原神宮の神域は約53万㎡と广大で、この神域の大半は『檀原』の地名に相応しく、カシを主木とした木々に覆われている。

遠つせの 風ひそかにも聴くごとく

檀の葉そよぐ 参道を行く

平成二十八年 神武天皇二千六百年祭にあたり美智子上皇后陛下（当時皇后陛下）が檀原神宮に参拝されたことをお詠みになられた御歌である。

今回は『檀の葉そよぐ参道』の杜はどのような経緯で造営されたのかを紹介したい。

檀原神宮は明治二十三年四月二日に創建された。創建時の境域は2万159坪であり、大正時代には拡張工事が行われ、敷地が3万2000余坪となった。そして神武天皇即位紀元二千六百年という記念すべき年である昭和十五年に向けて再び拡張工事が行われることとなる。この年を奉祝するため政府は昭和十年に『紀元二千六百年祝典準備委員会』を発足させ、国を挙げて記念事業を推進した。その中でも檀原神宮並びに畝傍山東北陵を中心とした記念事業は紀元二千六百年の核と位置づけられる。神宮の杜の整備が決定されたのは昭和十三年四月であり、記念の年である昭和十五年までの二年半という僅かな期間に広大な敷地の整備を行うこととなったのだ。

この記念事業において林苑整備の指揮を執ったの

が田阪美徳である。田阪は明治二十八年に広島県三原市で生を亨け、大正九年に東京帝国大学農学部農学科を卒業し、明治神宮造営局に入局する。

造営局廃止後は明治神宮外苑管理所技師として外苑の管理運営に当たり、昭和十一年からは内務技師として神社局に勤務し、檀原神宮をはじめとする全国の官国幣社の林苑整備に携わった。戦後は公園緑地の秩序回復に尽力し、再び明治神宮の技師となる。また、伊勢湾台風により被害を受けた伊勢の神宮の災害普及事務を囑託され、最晩年は大阪万博日本庭園の指導的立場にあった人物である。田阪は檀原神宮拡張整備事業について「この工事実施の一端を担当する光栄に浴した私として細目に渡つて施工内容を述べることは責務のように考えられる」として詳細な記録を残している。今回は田阪が残した記録などを少しだけ紐解き檀原神宮鎮守の杜の歴史に触れてみることにする。

田阪の鎮守の杜についての考え

田阪は当初の檀原の杜の印象について「従来の境域並に外苑として連なつて居た旧畝傍公園の樹木は大半がクロマツ、アカマツを以て充たされ、何れを見ても松ばかりの観あり、背景を為す畝傍山また然りで、檀原ではなく松原である」と述べており、この常緑針葉樹マツによる景観の根本的な変更を



写真① 田阪が「松原」と称した当時の参道風景

推進する（写真①）。

なぜ、景観を変更しなければならなかったのであろうか。田阪は鎮守の杜に対して次のように考えていた。「元来神社境内の樹林はその郷土木を以て構成することを本義とする。郷土木とはその土地に自然に育成為して居る樹木、その土地に育成為し得る樹木を指すのであつて、種が落ちて実生へその土地の自然林の一員として育成為し得る樹木を云うのである。」また、「神社の境内はその土地そのものが神ながらであつて、古来の自然態をそのまま保続することに尊さが存するものである」と。

田阪のこの考え方の基盤は明治神宮林苑計画によつて生まれたものである。明治末期から大正初期にかけては、神社の杜において相応しいのは人の手を加えて管理されるスギやヒノキなどの常緑針葉樹であり、自然林で多く見られる常緑広葉樹は人工林である常緑針葉樹には遠く及ばないと考えられていた。そもそも社寺の景観的価値として重要視されていたのは社寺の施設といつた人工的要素であつて、森林は神社の荘厳さを遺憾なく発揮させることが一つの目的と位置づけられていた。森林自体の価値はあまり議論されていなかったのだ。しかし、工業化により大気汚染の進む東京都心に永久性をもつ林苑を造る過程のなかで、森林自体が持つ「自然」性に価値が見いだされるようになる。明治神宮の杜は煙害に弱い常緑針葉樹ではなく、抵抗力のある常緑広葉樹を中心とすることで、土地本来の原始の自然林態を復旧

し、植生が変化せずに世代交代をすることを目指し造営された。この林苑造営の経験は神社一般のあるべき基準となり、森の自然性と神社の神聖性が結びついていく。田阪が勤務していた神社局においてもこの流れをくむことで、「神社には殿舎建築が備われば足りる。樹木、森林は其の後なるべきもの」から「森なくして神社なし、森ありてこそ神社完し」という考えが職員に共有されていたのだ。

さて、当時の檀原神宮において松ばかりが主木とされた理由については、この土地には松が最も適当なのであって、他の広葉樹は生育しないとされていたからであった。田阪は本事業の計画を立てるに当たり予め畝傍周辺の調査を行っている。その結果、檀原神宮と御陵との間付近に位置する大久保神社の境内は全林殆どカシ類であること、境内に隣接する久米寺の南半分がアラカシの純林であること、さらには一見松山の様であった畝傍山も北面六・七合目以上にはカシ類などの常緑広葉樹が混在していることを突き止めた。このことから神武天皇の御代にはこの地帯一帯はカシが生い茂っており、現在この付近にカシ類が生育しないのではなく、後世の開墾の結果として松林となったと推測するに至った。そして本事業においては往古の姿に還元することを目標としてカシ類を多く植生し、境内林苑を自然林態に誘導し継続性を有する常緑針葉樹と常緑広葉樹の混合林を理想とした。本事業では境域の在来木を移植しながら、あるいは活かしながらアラカシ、シラカシ

また、シイ、クスなど常緑広葉樹を新たに植生し、全体で7万6118本、107種類をもって神宮の杜が形成された。

●事業の様子

昭和十三年四月に始まった一大事業は昭和十五年の紀元二千六百年というのつびきならない期限付きであったことは先に述べた。この短い施工期間の中で完成を目指したため、拡張予定地にある民家の買収移転、大阪電気軌道の撤去と新軌道の敷設、県道の取り付けなどと平行して苑地の施工を行わなければならなかった。田阪自身「腹を切る覚悟で」「戦場に於けるが如き気持ちで突貫工事を試みなくてはならぬ」と当時の覚悟を邂逅している。このような厳しい条件下においても一大事業を為し得ることが出来たのは全国で組織された建國勤勞奉仕隊の力が大きい。作業日数にして延べ500日余り、7200団体、延べ121万4000人余りが事業に参加したのだ。ここからは事業内容の一部をみる。

●植栽準備

一、灌水について

田阪は草木に水を注ぐ『灌水』が支障なく十分に出来ることこそが植栽樹木が根付いて成長することに最も重要なことだと考えていた。供給される樹木が健康である以上は、枯損の大部分は灌水不足が原因であり、灌水さえ適度であるならば夏期の炎天下においてさえ、植栽をする

こと自体は大きな問題となりえないとしている。計画当初より本事業の遂行には夏期炎天下の植栽を覚悟していたのである。施工区域内の水流としては宮川と桜川とがあるのみで、宮川は元々灌漑用深田池より流出する用水路であってこれを植樹灌水に横から利用することは下流域の農民から苦情を持ち込まれることは必然であった。桜川も同様であり、川の水流を水田休閑期に利用するにしても広い境域の内のごく僅かしか供給できなかつた。そのため昭和十三年初夏、植栽をするに当たりまず井戸の掘削を行った。翌年の昭和十四年夏に入ると、施工区域内の民家の移転が実行に移り始める。その後は住宅地跡の井戸を利用することが出来、井戸水の利用が更に豊富になったとしている。

二、献木について

献木は紀元二千六百年奉祝会が主体となって昭和十三年七月より始まった。当時は支那事変勃発間もない時で世を挙げて軍事援護に奔走している折であり、また各府県に於いては大なり小なりの奉祝事業が計画されており、それらと平行して献木の募集を行った。そのためか、直接檀原神宮並びに畝傍山東北陵に近接している関西数府県の他には一般に本事業に対する関心は少なかつた。そもそもほぼ同様の手法を用いて造営された明治神宮内苑においては竣成まで七年、外苑は十年を要している。檀原神宮の場合は施工期間が短いことを理由として、当初より施工者である内務省神社局



写真② 植栽された樹木

も献木に依存せず購入によって樹木を賄う方針であった。そのため申込期限の昭和十四年六月までには献木申込数はわずかに2792本に過ぎなかったのである。しかし、この年の十一月十一日に檀原神宮本殿遷座祭が荘厳に執行されて以来、全国から参拝者が急に激増し、紀元二千六百年と関係して檀原神宮に対する国民の崇敬奉養の念はにわかに高調していく。これと共に献木の申し込みが次第に増加し、十四年十二月に於いてはその数9884本に達する。更に明けて紀元二千六百年の佳年は新年より引き続いて参拝者はますます増加し、最終的には予定を遙かに超過し、受け入れた献木は2万3028本に達したのである(写真②)。献木については全てを受け入れたわけではなかったとしている。檀原の郷土木として相応しい樹種を予め指定し、不適當と認めるものは都度理由を述べ断っているのだ。また、献木を申し込むに当たり、一定の区域を自分の献木のみで植栽したいという申し出も全て断っている。田阪は「あらゆる個々の献木が渾然として打って一丸となって神の森を構成する。やがては自分の献木がどこにあるかどれであるか分からなくなつてこそ、森全体に対して自分の献木を感じてくる。」と考えていたからだ。それ故に献木には当初献木者の名札を付けていたが朽ちて落ちたら再び付けなかったとしている。

三、植栽季節について

樹木の植栽には各々の種類によって植栽に適した季節があるが、本事業に於いては各樹種に渡りその適当な植栽季節に関わらず施工し、一年を通じて植栽を敢行している。その理由は施工区域の広さに対して、施工期間が短いことであった。紀元二千六百年に間に合わせるため、造苑植栽の常道に従つて数々の樹木を最も適当な季節に悠々と植栽施工をする余裕は絶対に無かつたのだ。だからこそ夏季炎天下においてすら植栽を強行し、冬季厳寒中に積雪をかき分けてまで植栽を進めなければならなかつた。特に適当季節外である厳冬にカシ類を植栽することは最も冒険であつたとしている。寒気の被害は夜分における根元の凍結が原因である事が最も多いので、樹木の大小数量に従つて必要な人数を揃えて即刻にその日のうちに移植を完了し、直ちに幹巻きを施すという方法がとられた。その結果として栽植された樹木の枯損率は予想を遙かに下回り、一割以下であつた。田阪自身随分無理な施工法とは思つたそうだが、「やってみたとこに於いては予想以上の成績を上げることが出来、私自身にとつても我々同士の工事関係者にとりても実に良き経験であつた」と振り返っている。

④ 表参道について

次に参拝者が最も神社の杜を身近に感じる参道を見ることにする。言わずもがな参道は境外より境内に入り大前に参進到達する道程であるが、その意義

は極めて大きく一步一步進むにつれて心が落ち着き、御神前にて参拝する気持ちが強くなつていく。いわば参道を参進することで自然と禊ぎ祓えが行われていく。このような役割を果たすため、参道の構造様式や参道沿いにおける林苑の整備が行われた。

檀原神宮の表参道は社殿に対して西に直線的に延びており、森に突き当たるところで直角に右折し、南神門に入ること始めて畝傍山を背景とした外拜殿側面が現れる。参進するにつれ景色が一転し、次第に神前に近づく気分を高調させるよう考え尽くされて造られている。この表参道の原型は大正四年四月三日の神武天皇二千五百年祭齋行前後の大正三年から同六年の間に行われた境域拡張事業において出来たものである(写真③)。この事業の林苑工事の計画並びに監督に当たつたのが折下吉延である。当時折下は奈良女子高等学校(現奈良女子大学)で講師として園芸学を担当しており、奈良から畝傍に通いながら現場の指揮を執つていた。本事業の大半が完成した後、明治神宮造営局技師に任命され明治神宮の内外苑の設計施工に従事している。

紀元二千六百年奉祝事業においては参道を新たに変更設定する必要はないとされ、在来線に準拠してこれを拡張延長する方針がとられたのである。拡張された参道には常緑広葉樹であるカシ類を用いて参



写真③ 大正4年頃の境内図

道並木が造成された。全国的に見ても常緑広葉樹が参道並木に使用されることは比較的少ないようである。その理由としては樹幹や枝張りがまちなちであり、列で植えたとき均整を保つことが難しいという点が挙げられる。檀原神宮参道のカシ並木は先述したようには往古の姿に還元することを目的としており、参道並木も樹木が生長するにつれ、あえて均一を保たないよう想定されている。全国的に見ても特例と言える参道なのだ。



写真④ 現在の参道。見返すと植樹島により境外が見えない。また手前には傾斜路が確認できる。

参道の構造も工夫されており、南神門前広場は手前参道より約三尺高くなっている。参道との連絡は中央が傾斜路、両側が石階段となっている。中央が傾斜路となっている理由については天皇陛下を始め皇族の御参拝にあたり御車での通行を可能にするためである。戦前の檀原神宮には多くの皇族方が御参拝なさっており、平成二十八年四月三日の神武天皇二千六百年大祭においても上皇(上皇后陛下)(当時天皇皇后両陛下)はこの傾斜を御車で通られ南神門前に着御されている。また、直線的な参道であるが故に参道広場入口に植樹島を設けることで参拝後の見返しの景観まで配慮されている(写真④)。

● 最後に

以上のように神宮の杜は檀原の地に相応しい神社の杜として考え抜かれ、造苑に携わる者の覚悟と多くの人の助力を得て造り上げられた。

田阪が残した資料の最後には「今後は専ら境域に於いては檀原神宮社務所当局、陵域に於いては御陵勤番所の御努力精励に期待する次第である」と記されている。

昨年の御鎮座百三十年に田阪が中心となって造営された神宮の杜は拡張整備より八十年を迎えた。二十年後の紀元二千七百年は檀原神宮の杜が造営拡張されてより百年の節目を迎えることとなる。そのとき、田阪を始め多くの先人が造り上げ、後世に託したこの杜が檀原の郷土の森であり続けられるよう維持管理に努めて参りたい。

重要文化財 旧織田屋形大書院・旧織田屋形玄閣(文華殿)
修繕工事について

重要文化財 旧織田屋形大書院・旧織田屋形玄閣(文華殿)は、天保十五年(一八四四年)に竣工し柳本藩邸(天理市)として伝えられていたが、昭和三十九年柳本区民より完全復原する事を条件として、檀原神宮に無償譲渡された。昭和四十年六月より移築工事がはじまり、昭和四十二年六月十五日に檀原神宮境内に移築されるの重要文化財に指定された。

これまでの主だった修理は、昭和五十八年に屋根の修理、平成十年に台風七号による災害復旧の為の屋根部分修理を行っている。

以前より経年劣化による建物全体の歪み、屋根部分の雨漏り等の問題があり、長年の懸案事項であったが、平成二十六年より着工した重要文化財檀原神宮本殿建造物保存修理工事を契機に、県内には多くの古社寺・有名社寺があり国庫補助による修繕工事の希望が多い中、公益社団法人全国国宝重要文化財所有者連盟(略称「全文連」)での県内選出の国会議員への『文化財保護に関する政府予算の要望書』の提出や、県文化財保存課への働きかけにより、今回の修繕工事を行う事となった。



重要文化財 旧織田屋形

● 工事概要

保存修理建造物 重要文化財 旧織田屋形大書院

重要文化財 旧織田屋形玄閣

計二棟

事業期間

令和二年六月より令和八年三月
(七〇ヶ月)